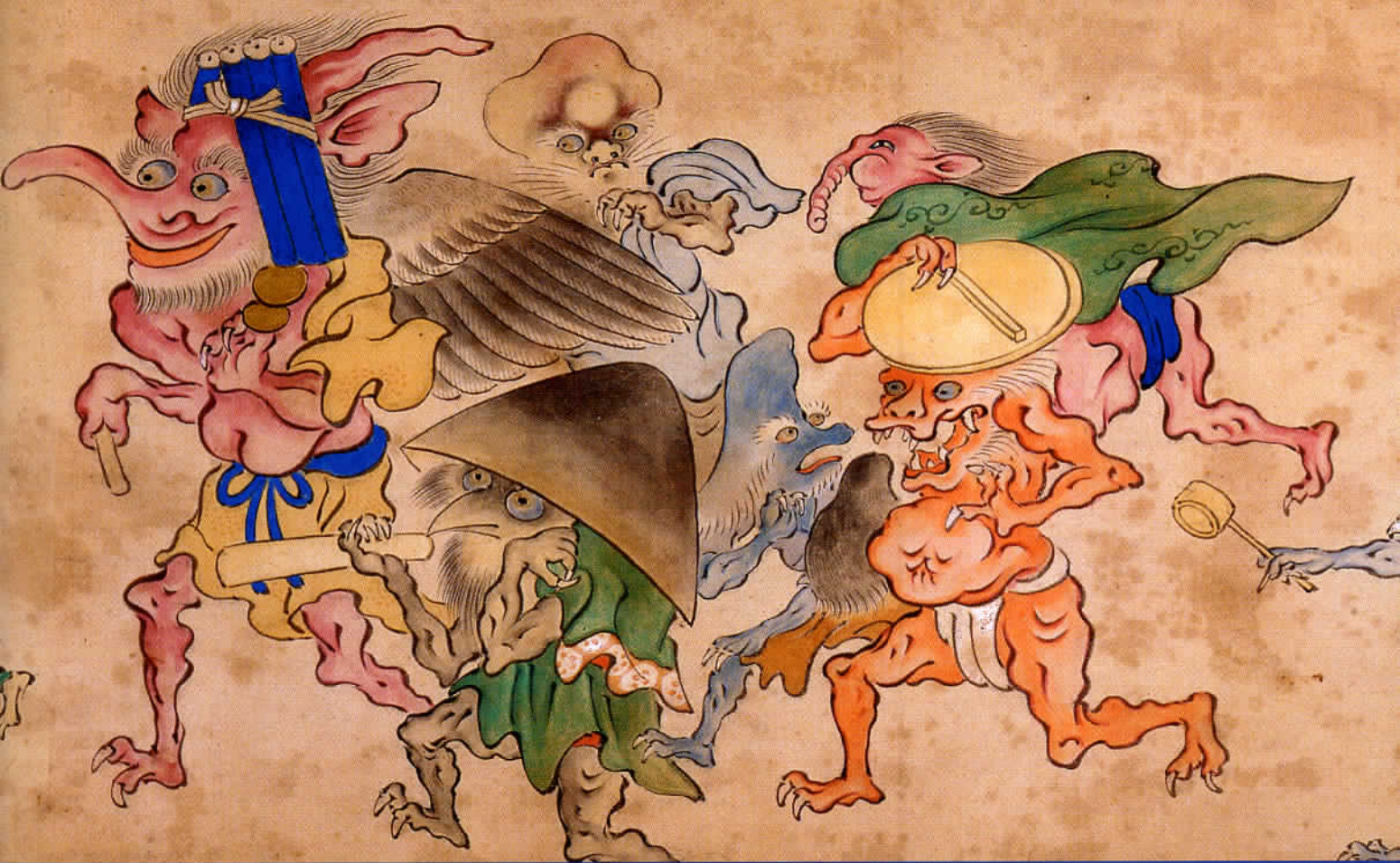


REKIHAKU

The Future of History

歴博のめざすもの 事例集 2
博物館型研究統合の実践



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館
NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

はじめに

国立歴史民俗博物館は、日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関である。その使命は、人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において、未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにある。

歴博は、2004年の法人化を機会に、その基本理念と基本方針を再確認し、館外の皆様の理解をいただくため、小冊子『歴博のめざすもの』を刊行した（2007年3月）。本冊子は、この『歴博のめざすもの』において、歴博のもつ博物館機能を十分に発揮する独自の研究スタイルとして提唱した「博物館型研究統合」が、どのように実践されているかを具体的に示す事例を掲載した『歴博のめざすもの 事例集1－博物館型研究統合の実践－』（2010年3月刊行）の続編である。〈資源〉〈研究〉〈展示〉の三つの要素を有機的に連携させる「博物館型研究統合」による成果と、その可能性の一端をご紹介できれば幸いである。

目次

鉛同位体比法による青銅原料などの産地推定研究	2
古代の石碑の調査研究と公開	6
平田篤胤関係資料の調査研究と公開	10
中世東アジアプロジェクト－中世の生産と流通史研究－	14
怪談・妖怪コレクションの調査研究と公開	18
神社資料の多面性に関する総合的研究	22
参考編	26

歴博のめざすもの

— 博物館という形態の大学共同利用機関として —

日本の歴史と文化の研究

— 未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解を実現する —

博物館型研究統合の推進

— 博物館という形態を活かした新しい研究スタイル —

共同利用性の充実

— 研究資源・研究過程・研究成果を国内外の研究者と共有する —

新しい研究者の養成

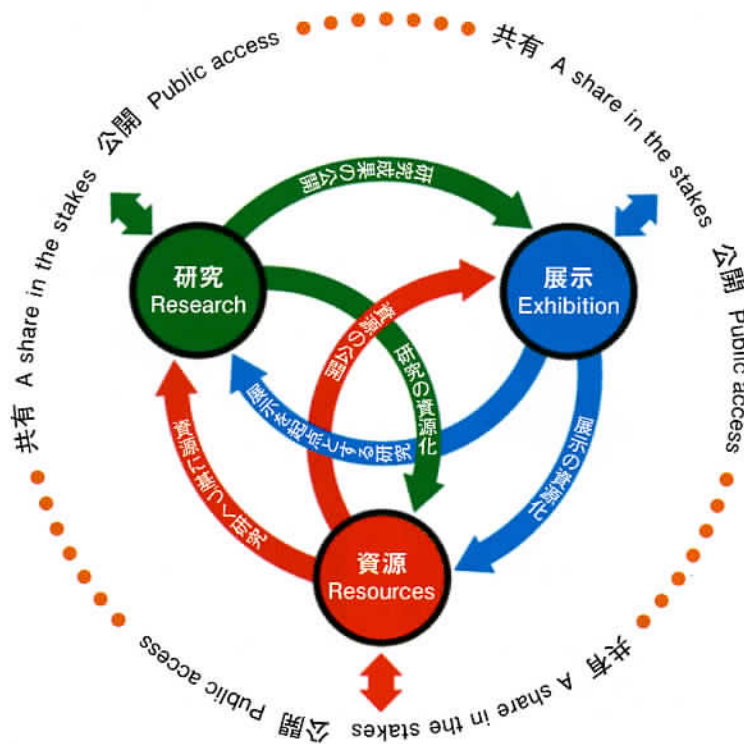
— 博物館型研究統合を担う人材 —

日本の歴史と文化への理解の促進

— 多様な歴史像と柔軟な歴史認識を国内外のすべての人々に提供する —

博物館型研究統合

歴博は、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにその成果を積極的に共有・公開することによって、博物館という形態をもつ大学共同利用機関の特徴を最大限に活かした研究を推進している。



鉛同位体比法による青銅原料などの産地推定研究

鉛は、化学的性質が同じで重さが異なる4種類の原子（同位体）の混合物である。それぞれの同位体の混合比率（同位体比）は、産出する鉱山や地域ごとに固有の値を示すので、鉛を含む歴史資料の鉛同位体比を調べることによって、その原料産地を推定したり、資料間の関連性を考察したりすることが可能となる。その分析には質量分析法という特殊な方法を必要とするが、歴博ではそのための装置を1990年度に導入し、考古学・文献史学・美術史学と自然科学との学際的共同研究によって、成果をあげてきた。なお、現在、国内で歴史資料を対象としてこの分析を行っているのは、歴博を含めて2機関のみである。

【資源】

1. 対象とする資料

本研究の主な対象は青銅資料である。表層部から微量の鏽（可能な場合には金属部分）を採取して含まれている鉛の同位体比を測定し、資料のもつ歴史的位置付けとあわせて考察することによって、原料の産地や資料間の関係などを明らかにしようとするものである。青銅資料のほかに、銀製品、スズ製品、釉薬、ガラス、銅・鉛鉱石、それらの製錬スラグなど、主成分や副成分として鉛を含む資料も調査対象となる。

これまで、歴博所蔵資料のほかに、日本国内・中国・韓国・タイ・ベトナムなどの遺跡出土資料やさまざまな機関が所蔵する資料を対象として研究を実施してきた。

2. 収集資料の概要と特色

館蔵資料として本研究に用いられたのは、大川天頭堂銭貨コレクションの中の皇朝十二銭と、馬形帯鉤である。



馬形帯鉤

大川天頭堂銭貨コレクションは、大川鐵雄氏（1897～1975年）によって集められた質・量ともに日本有数のコレクションの一つである。大川氏は、1949年に日本フェルト株式会社取締役社長に就任し、その後、会長、社長を歴任した。昭和初期から本格的な貨幣収集を始め、1957年に日本貨幣協会を創立し、初代会長に就任した。同氏が収集した日本を含む東アジアの銭貨は総計8万枚を超え、その中には、非常に数が少なく、自らの雅号にも定めた、中国・遼（907～923年）の天頭通寶をはじめ、貴重な貨幣が多数含まれている。この膨大なコレクションは、大川氏の逝去後、ご遺族の意志によって文化庁に寄贈され、1979年本館に管理換となった。コレクションの内容は主として銅銭であり、そのほかに和同開珎の銭範や貨幣関係の典籍などからなる。皇朝十二銭は160点が含まれている。

馬形帯鉤は、当初12点の一括資料として購入が検討されたものであるが、透過X線観察と蛍光X線分析が行われた結果、6点が真物、6点が贋物と判定されたため、前者を購入し、後者は参考資料として寄贈を受けた。

3. 資料調査と成果の公開

大川天頭堂銭貨コレクションについては、共同研究「同位体を用いた産地決定法の研究」（1993～1995年度）および企画展示「お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—」（1997年）展示プロジェクトの一環として調査が行われた。内容としては、①資料概要の把握、②過去に作成された目録との対照と資料番号の整理、③展示用資料を中心とする写真撮影、④皇朝十二銭の鉛同位体比分析と非破壊による成分分析、⑤関連資料の調査 などである。馬形帯鉤のX線調査結果については、広報誌『歴博』29号（1988）に掲載された。

【研究】

- ※ 共同研究「同位体を用いた産地決定法の研究」(1993～1995年度) (研究代表者 齋藤努)
- ※ 科学研究費補助金・海外学術研究「日中古代金属遺物の年代および産地に関する自然科学的比較研究」(1995～1997年度) (研究代表者 田口勇)
- ※ 科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)「日中古代青銅器および土器の産地に関する自然科学的研究」(1999～2000年度) (研究代表者 今村峯雄)
- ※ 科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」(2003～2005年度) (研究代表者 齋藤努)
- ※ 国際学術交流協定による共同研究「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」(2007～2008年度) (研究代表者 齋藤努・藤尾慎一郎)

1. 研究の目的

歴史資料に適した、迅速で信頼性の高い試料採取・前処理・測定の方法を開発する。研究計画の立案・資料選定・分析の実施・データの検討・測定結果に基づいた歴史的考察などの、研究の一連の段階のすべてに、人文科学と自然科学の両分野の研究者が十分な討議と情報の交換を行いながら参画するという、学際的研究スタイルを確立する。

これらに基づいて実資料の調査を実施し、青銅器などの製品の製作と流通、原料の動きやその産地の変遷などについて考察を行うことによって、人文科学的な研究のみでは得られない新たな歴史像の構築をめざす。

2. 研究の成果

(1) 分析法の開発

鉛同位体比測定における分析化学的問題点を検討し、新しい分析法「高周波加熱分離—鉛同位体比測定法」を開発した。この方法は青銅器、鉛釉、セラミック胎土、ガラスに適用されて方法の妥当性やデータの精度・確度が検証され、従来法よりもはるかに迅速で信頼性の高い方法であることを確認することができた。

(2) 銭貨

館蔵および日本銀行貨幣博物館所蔵の皇朝十二銭74点について測定を行い、その大部分のデータがきわめて近

接した数値を示すことがわかった。これは奈良時代の青銅製品にも頻出し、また奈良三彩・平安緑釉ともよく一致する数値である。また、山口県の長登銅山跡や付近に位置する平原遺跡から出土した鉛製錬関係資料や銅鉱石などの数値と重なっており、考古学的な検討結果とあわせると、この長登銅山は原料供給源の有力な候補と考えられる。ただし、考古学的な確証は得られていないものの文献史料などから当時の採掘が推測されている福岡県香春岳の銅鉱石にも、これと同様の数値を示すものがあることがわかり、今後の検討課題となった。

これと同様に、日本銀行貨幣博物館との共同研究によって、中世模鑄銭、近世銭貨についても調査を行っている。

(3) 中国青銅器

北京科技大学などとの共同研究により、長江流域から出土した商代中期(B.C.14C.)～唐代(A.D.7～10C.)の青銅器やスラグ等の資料172点を分析し、それぞれの原料産地について考察した。商代青銅器については、「高放射起源鉛」とよばれるきわめて特異的な鉛同位体比を示すもののあることが従来から指摘されており、またその原料産地について会沢鉱山など四川省・雲南省・貴州省の境界付近であるという説が唱えられていた。しかし、中国科学院地球化学研究所などとともに鉱床と青銅器のデータを詳細に比較検討したところ、この説は成立し難いことがわかった。

(4) 韓国青銅器

慶尚大學校博物館などとの共同研究により、古代朝鮮半島の青銅資料の原料産地と、朝鮮半島と日本との交流関係を明らかにするための端緒として、韓国嶺南地域(旧加耶諸国および新羅の南の一部)から出土した青銅器時代～三国時代の青銅器や宮内庁所蔵青銅器、歴博所蔵の馬形帯鉤など240点を分析した。特にデータの集中する2つのグループが見出され、そのうちの1つは中国華北産と判断された。もう1つは従来の解釈であれば中国華中～華南産とされてきた数値範囲であるが、資料の時期



長登銅山 大切坑



分析試料の採取（福岡）



分析試料の採取（韓国）



日韓研究会（歴博）

や周辺鉱山に関する検討から、朝鮮半島産原料である可能性も視野に入れて検討する必要があることがわかった。

これらの成果をふまえ、国際学術交流協定に基づく韓国国立中央博物館との共同研究により、同時代の北よりの地域（旧百済を中心に、新羅北部地域のほか高句麗系資料が多く出土する地域）における状況の調査と、日本における国産原料開始時期（7世紀中頃以降。大量に使用するのは8世紀以降）前後における原料産地の変遷、特に朝鮮半島からの原料輸入の可能性について検討を行った。

3. 成果の公表・社会への波及

(1) 論文集

「同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集、国立歴史民俗博物館（2001）

「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集、国立歴史民俗博物館（2010）

(2) 出版物

『歴博フォーラム 科学の目でみる文化財』国立歴史民俗博物館編、アグネ技術センター（1993）

『考古学と化学をむすぶ』馬淵久夫・富永健編、東京大学

出版会（2000）

「化学で探る考古学の謎」『化学と教育』第48巻第5号日本化学会（2000）

「モノが語るヒトの営み 金属製品から見る① 皇朝十二銭 国づくり・金づくり」『日経サイエンス』第36巻第4号日経サイエンス社（2006）

「皇朝十二銭の原料と製作技術」歴史系総合誌『歴博』第144号（2007）

『必携 考古資料の自然科学的調査法』齋藤努監修、ニューサイエンス社（2010）

(3) 講演

『質量分析セミナー』神奈川高度技術支援財団（1995）

『第22回特別教室大学院セミナー 夢とロマンの科学』東京理科大学薬学部（1996）

『放射線利用研究会』日本原子力産業会議（1997）

『歴博入門講座』国立歴史民俗博物館（1997）

『保存科学研究集会』奈良国立文化財研究所（1998）

『プラズマ分光分析研究会』東北大学金属材料研究所（1998）

『日本鉱業協会分析現場担当者会議』日本鉱業協会（1999）

『日本分析センター月例セミナー』日本分析センター（2009）

『千葉県分析化学交流会』日本分析化学会（2010）

【展示】

🌀 企画展示「科学の目でみる文化財」（1992年3月20日～5月17日）（展示代表者 神庭信幸）

🌀 企画展示「お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—」（1997年3月18日～5月18日）（展示代表者 西谷大）

🌀 特別企画「歴史を探るサイエンス」（2003年10月21日～11月30日）（展示代表者 宇田川武久）

1. 展示の趣旨

「お金の玉手箱」は、日本の貨幣の歴史を、東アジア全体の視点から位置付けるとともに、それぞれの歴史的背景や製造技術などを含めて総合的に展示したものである。その中に設けられた皇朝十二銭の科学調査のコーナーで、和同開珎の復元製造工程とともに、鉛同位体比分析による研究結果が示された。

「科学の目でみる文化財」と「歴史を探るサイエンス」

は、歴博で行われている自然科学系の研究成果を集約した展示であり、年代測定、画像解析、材質分析、X線調査などとともに、鉛同位体比法による産地推定について、その原理や特徴、得られた結果を紹介した。

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

従来、歴史資料の自然科学的調査は、資料のもつ歴史



特別企画ポスター

的・文化史的意味などを考慮せず、単にデータを出すためだけに行われることも多かった。しかし、これらの展示では、人文科学と自然科学両分野の研究者が十分な討議と情報交換のもとに策定された計画に従って、人文科学的な問題意識に基づいた調査資料の選定

が行われ、両分野の研究者が自然科学的方法の特徴と限界を理解した上で分析調査を実施し、またその結果に対して人文科学的な視点から解釈を加えるという、学際的

な研究のあり方とその成果が示された。これは歴史資料を自然科学的に調査する際の一つのモデルケースとなり、前記のように、さまざまな自然科学系研究機関・団体から講演の依頼がくるようになった。

(2) 新たな研究課題の発見

鉛同位体比分析の研究は、これまで資料どうしの比較によって議論が展開されることがほとんどであり、それによって地域間の流通や交流関係など考古学・歴史学的に重要な多くの成果をもたらしてきた。その一方で、研究上の分類名となっている「産地推定」については、原料が産出した地域を示すにとどまり、鉱山のレベルまでの詳細な推定を行うことはきわめて困難であった。しかしわれわれは、皇朝十二銭の事例により、自然科学的な分析データの他に、考古学や文献史学、民間伝承など人文科学的な研究成果をあわせて総合的に考察することによって、文字通りの「産地推定」を行うために必要な条件を提示することができた。この手法を他の時代や地域に適用し、原料産地推定の事例を重ねていくことが今後の課題の一つである。

【新展開】

✂ 基盤研究「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」(2008～2010年度)(研究代表者 齋藤努)

✂ 科学研究費補助金・基盤研究(B)「古代日韓における青銅器の製作および流通と原料産地の変遷に関する研究」(2009～2011年度)(研究代表者 齋藤努)

皇朝十二銭は、日本において国産の青銅原料が大量に使用され始めた時期に発行された。それ以前の、国外産原料を使用していた時期について、従来の鉛同位体比研究では中国からの原料輸入を中心に論じられてきた。しかし、われわれがこれまでに行ってきた研究の蓄積により、朝鮮半島における製錬開始時期と、日本における国産原料使用開始時期前後の原料産地の変遷、特に朝鮮半島産原料の流入の可能性が新たな問題として浮かび上がってきた。朝鮮半島では古代の製錬遺跡がみつからず、製錬開始時期を考古学的に論ずることが困難な状況にあるが、鉛同位体比研究からのアプローチによって何らかの手がかりが得られる可能性があるのではないかと期待している。

この課題への取り組みとして、国内の当該時期における青銅製品や関連する鉱山・製錬遺跡資料の調査を行い、また韓国の大学や文化財調査財団などの研究機関と共同研究を実施している。



遺跡の調査(韓国)

古代の石碑の調査研究と公開

歴博は、創設当初から、毎年1基ずつのペースで、日本列島内に現存する古代の石碑のほぼすべてにあたる14碑を複製した。1997年の秋、企画展示『古代の碑—石に刻まれたメッセージ』を開催した。北は宮城県多賀城碑から南は熊本県浄水寺碑まで列島内に分布する古代の石碑が一堂に会した本展示を通じて新たな発見と研究の進展をみた。現在歴博で実施している古代の文字文化に関する基盤研究・国際交流事業などにおいても、これらの石碑が重要な研究資料となっている。

【資源】

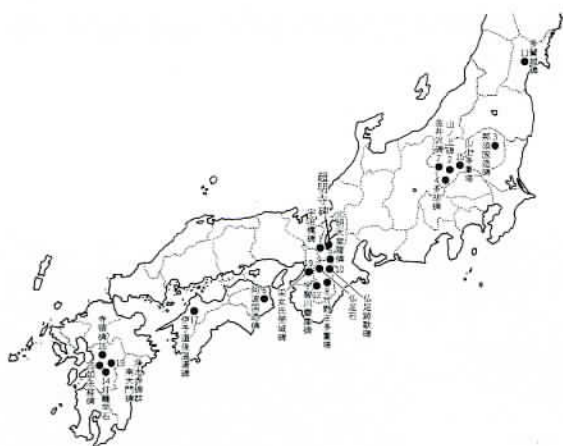
日本列島に石碑が立ちはじめたのは7世紀頃からと考えられる。それ以降、9世紀前半までの間に現在知られているかぎりでは26基が立てられ、17基が現存している。この石碑の数は、石碑文化の華やかな古代中国および朝鮮に比べると、きわめて少ない。そもそも立碑は日本固有の文化ではない。そのようななかで立てられた碑は、何らかの形で中国・朝鮮文化に強く接近した者（渡来人を含めて）の手によるもので、それぞれ特別の意味が込められていたであろう。

歴博初代館長井上光貞氏は、中国の陝西省“西安碑林”にならない、日本古代の現存する碑を全点複製し、歴博の

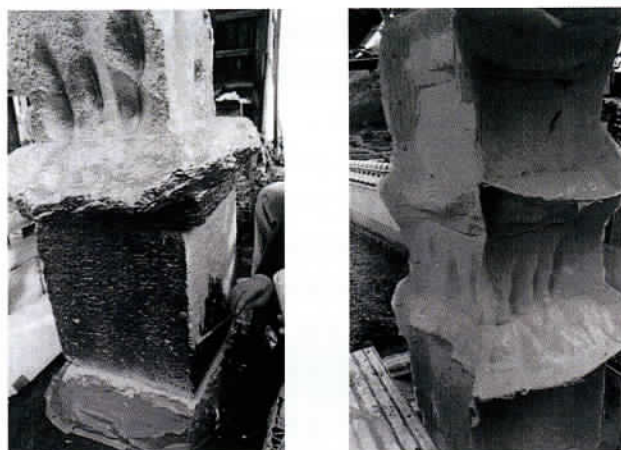
庭に“碑林”として展示したいという構想を抱いていた。その意向をうけて、考古研究部は、開館以来、毎年1基ずつ精密な複製品を製作し、16年の歳月をかけ、現存する14基の石碑の精巧な複製を完成させた。

その複製方法は、①錫箔押し（錫をたたいて、紙のように薄く平らに延ばしたものを石碑全面に押し）②シリコンを一面に塗りつける。③そのシリコンの上に石膏を塗布。④型を外し、外された型に合成樹脂を流し込み、複製品を完成させる。

その複製品はきわめて精度の高いもので、調査研究資料として十二分に活用でき、拓本の採択も可能である。



古代日本の石碑



石碑（奈良県明日香村竹野王多重塔）の複製製作状況

【展示】

1997年9月30日より11月24日までを会期として企画展示「古代の碑—石に刻まれたメッセージ」を開催した。この企画展は、現存の14碑の正確な複製品や復元品およびその関連資料を一堂に集め、古代の碑の全貌を紹介したのである。

日本列島各地に散在する古代の碑を訪ね歩くのは大変

である。しかも、実際に現地に赴いても条件の悪いところが多いうえに、保護のために覆屋の中（おおい）にあり、暗くてよく見えなかったり、また碑の裏側から碑文を見ようとしてもなかなか叶えられないのが実情である。その意味では本展示は、複製とはいえ、碑を比較しながら碑全体をじっくり観察できる絶好のチャンスである。このよう

な企画展示が実施できるのは、やはり博物館ならではの
ことである。



企画展示「古代の碑」展示風景



覆屋の中の多賀城碑

仙台藩四代藩主伊達綱村つらねむらの時に（1700年前後）、水戸藩主徳川光圀みつくに（水戸黄門）の勧めで建築した。写真は1998年に解体修理されたもの。

【研究】

1) 熊本県浄水寺碑群の再検討

古代の石碑の中で、国の指定もなく、古代史研究に歴史資料として全く活用されてこなかったのが熊本県の浄水寺碑群であった。

浄水寺は熊本県のほぼ中央、八代やつしろに近い下益城郡豊野村（現宇土市）にある。古代でいえば、国府が一時置かれたとされる肥後国益城郡と宇土郡、八代郡の三郡のほぼ真ん中ぐらいの位置である。『類聚国史』に、天長五年（828）肥後国浄水寺じょうすいじが定額寺として登録されたことがみえる。定額寺というのは、国分寺のような国の官寺に準じた形で鎮護国家を祈らせるために特定した寺である。浄水寺はおそらく8世紀の後半に建てられ、9世紀前半に整備されたと考えられる。

浄水寺には南大門碑と寺領碑とうりょうひし、灯籠竿石とうろうさざいし、如法経碑にょぼうきょうひという4つの碑が立てられている。南大門碑は延暦9年（790）、灯籠竿石は灯籠の竿部分が残っており、延暦20年（801）のものである。さらに浄水寺の領地を書いた寺領碑は天長三年（826）という年号をもっていて、この浄水寺には8世紀終わりから9世紀前半にかけて3つの古碑が並んでいる。さらに平安時代後半の如法経碑（康平7年〈1064〉）もあり、このように4つの古代の碑が並んでいる所は日本列島では浄水寺しかない。

歴博の複製製作に伴う調査によってまず、南大門碑は浄水寺を創建した僧奘善じょうぜん、灯籠竿石と寺領碑はその弟子葉蘭やくらんによってそれぞれ作られたことが明らかとなった。

またとくに4碑のうちでも碑の釈文が定まっていなかった寺領碑を綿密に調査することになった。

最初この碑に接した時、私は大変読みづらい碑だと

思った。浄水寺付近は阿蘇山の噴火でできた溶岩地帯で、碑の石材も凝灰岩ろうがいがんである。碑文はその碑面を平滑にして刻むが、凝灰岩の場合にはどこまで削っても気泡があり、彫った文字の字画なのか自然の凹凸なのか、なかなか区別がつかない。この碑を最初に読まれたのは1960年代の熊本大学松本雅明氏であり、その松本氏の釈文は、『平安遺文』に載っているが、その釈文ではなかなか古代史の史料として使いがたいこともあって、長い間、古代史の研究者はこの寺領碑にほとんど目を向けなかった。

しかし、私は疑いのかかった資料については、やはり真偽の検証を試みるのが研究者の役割であろうと思う。そのうえ浄水寺碑の場合、碑はつい最近まで無人の神社境内に覆屋もなく4碑が立っている危険な状態に置かれていたのである。一日も早くこれらの碑の釈文を確定し調査報告書をまとめ、国の重要文化財の指定を受け、保



熊本県浄水寺碑群

〔右から灯籠竿石・如法経碑・寺領碑〕

を誇った中国や朝鮮の碑とは非常に大きな違いを示している。数も17碑ときわめて少なく、年代的にも7世紀から9世紀半ばまでに集約されている。碑の内容を見ても、中国や朝鮮半島の碑の場合、高句麗こうたいろうりの好太王碑にみられるように王の顕彰の色彩が強く、また新羅で顕著に確認されるように王が地方に赴いた際に巡幸碑が立てられている。日本では、古代に天皇が行幸しても、そこに碑が立つということはない。

数少ない日本の碑の中で政治的色彩をもつ碑は、多賀城碑と多胡碑だけである。多賀城碑は多賀城を修造した藤原朝臣朝あさかり獨の顕彰碑と考えられる。上野の多胡碑も建郡碑、つまり和銅4年(711)に多胡郡を設置したことを記した碑である。那須国造碑も日本三古碑の一つということで、多賀城碑や多胡碑と並び称せられ、政治的碑ととらえがちであるが、それは国造碑という名前のせいであろう。那須国造碑はあくまでも亡くなった国造を子供が讃えた、いわば供養碑であるという点で、上野三碑の多胡碑を除く山ノ上碑や金井沢碑ときわめて近い。文字もとても小さく端正な文字で慎ましく書いている。それに対し、多賀城碑と多胡碑は文字が見るものに迫るような大きさと、やはり政治的な匂いをそこに漂わせている

碑といえる。他の碑はすべて仏教色が認められ、京都の宇治橋碑にしても道登という僧侶を讃えた碑であり、浄水寺碑群はまさに寺院に関わる碑そのものである。

ところで、日本固有の文化ではない石碑をなぜ立てたかということが問題になろう。多賀城碑は、朝獨という当時外交官として東アジアの情勢に通じ、碑の文化を知りつくした人物が立てている。多胡碑も渡来人(胡人)が多いという郡名(多胡郡)どおりの渡来人による建碑である。那須国造碑も中国の年号(永昌元年)で始まる碑である。

また、浄水寺の寺領碑は、紙の文書のを碑としてなぜ彫りつけたのか。僧奘善および弟子の葉蘭が中国の玄奘法師にあこがれたゆえに碑にたくしたのではないかと考えられる。そのようにとらえると、すべての碑は、渡来人を含めて、何らかの形で中国や朝鮮の文化に深く接した人が碑を建てており、それぞれに特別の意味が込められていると思われる。

以上のような日本の古代の碑の特質は、博物館で精密な複製製作した14碑を展示室にすべて並べてみて、はじめて認識できた事実といえる。

【新展開】

1) 共同研究—文字文化の中の石碑

平成20(2008)年から2ヶ年、歴博共同研究の準備研究として「古代における文字文化形成過程の基礎的研究」をすでに実施した。平成22(2010)年～平成24(2012)年の歴博共同研究・基盤研究「古代における文字文化の総合的研究」および科学研究費補助金基盤研究(A)「古代における文字文化形成過程の総合的研究」(平成22年度～26年度、研究代表者 平川南)において、古代日本の文字文化形成過程における石碑の歴史的意義について検討を行う。特に古代朝鮮・中国の石碑との比較研究を実施する予定である。また、国際交流事業として、歴博は学術研究交流協定を結んでいる韓国国立中央博物館との国際共同研究[第2期]「古代日本と古代朝鮮の文字文化に関する基礎的研究」(2009年度～2012年度)において、古代朝鮮と日本との文字文化比較の観点から、歴博の古代碑複製品の綿密な検討を行っている。さらに2011年秋、韓国国立中央博物館で行われる特別展示「文字からみた古代人の生活」では、歴博の古代碑複製品が展示される予定である。

2) 館内中庭回廊展示「碑の小径(いしづみのこみち)」

1997年の企画展「古代の碑」で公開して以降、館内の収蔵庫に保管されていた石碑(複製品)を、2008年歴博の中庭の回廊に「碑の小径」として、10基展示した。

屋外のため、自然光で一日のうち、常に観察条件が変わるが、日本列島に現存する石碑10基(このほか多賀城碑は第一展示室(古代)に常設されている)を間近に一文字一文字時間制限もなく、じっくりと観察できる。もうすでに大学の史学科等の講義・演習に活用されている。

「碑の小径」は開館以来の念願であった“碑林”構想がようやく実現したといえよう。



中庭回廊展示「碑の小径」

平田篤胤関係資料の調査研究と公開

平田篤胤関係資料は、歴博が所蔵する近世から近現代にかけての文書を中心とする歴史資料のうち、著名な人物に関するもので、かつ大きな分量を擁する資料群であり、大久保利通関係資料、旧侯爵木戸家資料（孝允～幸一）とともに代表的なものである。篤胤の思想家としての影響力と全国に広がった膨大な数の門人の存在は、時間と空間を越えた広がりをもったものであり、その資料はアプローチのし方や対象の選び方によって多様な可能性を秘めているといえる。

【資源】

目録刊行『国立歴史民俗博物館資料目録6 平田篤胤関係資料目録』（平成18年度）

1 収集資料の概要

国立歴史民俗博物館が所蔵する平田篤胤関係資料は、国学者平田篤胤（1776～1843）とその子孫が残した資料群である。その内訳は以下の通りである。冊子833件、門人帳18件、書翰2,338件、箱824件、盛胤382件、祝詞417件、祝詞冊子33件、草稿732件、和装573件、版本1,496件、摺物29件、軸物33件、物品256件。総計では7,964件となる。

2 収集の経緯

この平田篤胤関係資料は、篤胤の子孫が宮司をつとめる平田神社（東京都渋谷区代々木）に伝来した。本館では、2001（平成13）年10月から平田神社において予備調査を行い、文書整理用封筒への資料収納と目録書き上げ作業を開始した。2003年2月に一部の資料を佐倉に運搬し、平成14年度予算で購入した。さらに、平成15年度末には、残った資料の一部についての購入を行い、2004年1月に資料を本館に運搬した。平成16年度には、2005年2月残り資料を平田神社から本館へ運び入れ、最終的な資料購入を行った。これにより、平田篤胤関係資料は、社宝として神社が保存していく書画などの一部資料を除き、大多数の資料については本館に収蔵されるに至った。

3 収集資料の特色

整理にあたって採用した分類項目毎に簡単な解説をすれば以下の通りである。「冊子」は、縦帳・横帳・綴などの冊子の形態をとった資料である。日記・会計帳簿類などが含まれる。「門人帳」は、平田篤胤とその没後門人の入門記録である。5種類の門人録がある。「書翰」は、最も分量が多いものであるが、平田家の家族間でやりとりされた手紙から、他の国学者から篤胤らにあてた書簡、全国各地の門人からの書簡などである。「箱」は、整理前の段階で箱に収納されていた資料である。鏡胤の手になる揮

毫の下書きが多いほか、明治初年の鏡胤・延胤あて辞令などが含まれる。「盛胤」は、篤胤の曾孫である平田盛胤関係の資料のまとまりを分類したもの。当然ながら時期的に新しく、明治中後期から大正・昭和期の私文書が多い。教員や神官、各種の公職をつとめた盛胤の辞令がそろっている。「祝詞」と「祝詞冊子」は、盛胤が神官として読み上げた祝詞である。大正から昭和戦前期のものであり、1通毎のものと綴り合わされたものがある。「草稿」と「和装」は、平田篤胤の著作の草稿をはじめ、他の人物の著作等の写本類である。篤胤の著作が彼の学問内容を検討する上で第一級の価値を有することは言うまでもない。「版本」は、印刷・出版された書籍である。篤胤の著作や気吹舎の刊行書はこの中に含まれる。他は平田家の蔵書であり、篤胤が読んだと思われる本もあれば、はるか後年の昭和戦後期の出版書までが含まれる。「摺物」は、気吹舎蔵版を中心とした一枚ものの印刷物である。「軸物」は、掛け軸である。篤胤が揮毫したものほか、彼の所蔵品だったもの、後に作成されたもの、集められたものなどである。「物品」は、篤胤が使用した本箱・文机・筆・硯や烏帽子・着衣など、遺品類である。



平田篤胤肖像画

4 資料調査の概要と意義

篤胤没後、平田家では篤胤が残した資料を大切に保存してきた。しかし、過去において、一部については研究者が閲覧・利用したことがあったものの、その全体像は明らかにされることがなく、資料の多くは同家に眠っていた。とりわけ、篤胤の著作の草稿・版本の類は、『平田篤胤全集』に収録するためなど、その時々において調査・研究の手が加わっていたものの、それ以外の膨大な文書・書籍・遺品



共同研究での調査のようす

などについては、ほとんど手つかずのまま、人の目に触れることなく残されていたと言ってよい。本館の調査・整理・目録作成作業の結果、それらの全貌が明らかになったわけで、今後研究を進めるにあたっての基礎的な条件を整えることができた。

5 成果の公開

- (1) 科学研究費補助金研究成果報告書『平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―』(2007年3月、2分冊、617頁)
- (2) 『国立歴史民俗博物館資料目録6 平田篤胤関係資料目録』(2007年3月、480頁)



平田篤胤関係資料目録

【研究】

科学研究費「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―(基盤B)」(平成15～18年度)(研究代表者 宮地正人、2005年8月から樋口雄彦)

1 研究の目的

平田篤胤関係資料の整理・目録化を行うとともに、研究を進める上での基本となる一部の文書資料については翻刻を行う。また、情報の相互往復の全体像を把握する中で平田篤胤関係資料の位置づけを考えるべく、秋田・岐阜・長野・千葉・東京などで篤胤関連や門人側の資料などの調査を行う。

2 研究の成果

『国立歴史民俗博物館研究報告 第122集 平田国学の再検討(一)』(2005年3月、224頁) 気吹舎日記(篤胤の日記)8点、両親宛平田延胤書簡39点、三河関係平田家書簡16点、特別企画「明治維新と平田国学」に展示した資料などの解題・翻刻を収録する。

『国立歴史民俗博物館研究報告 第128集 平田国学の再検討(二)』(2006年3月、506頁) 気吹舎日記13点、両親宛平田延胤書簡61点、天保二年平田鏡胤「三州行日記」の翻刻を収録。

科学研究費補助金研究成果報告書『平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―』(2007年3月、2分冊、617頁) 平田篤胤関係資料の目録が収



『研究報告』平田国学の再検討(一)～(四)

録されている。ただし、本館所蔵ではない資料を一部含むなど、『国立歴史民俗博物館資料目録6 平田篤胤関係資料目録』とは、収録内容や分類・配列に差異がある。

『国立歴史民俗博物館研究報告 第146集 平田国学の再検討(三)』(2009年3月、392頁) 金銀入覚帳8点、文政六年平田篤胤上京日記(続)の翻刻を収録。

『国立歴史民俗博物館研究報告 第159集 平田国学の再検討(四)』(2010年3月、164頁) 既刊の『国立歴史民俗博物館研究報告』第122集、第128集、第146集、お

よび科学研究費補助金研究成果報告書に登場する人名・書名について、その頁数を表示した人名索引、書名索引である。

3 成果の公表・社会への波及

第48回歴史博フォーラム「明治維新と平田国学」（2004年9月25日、東京銀座・ヤマハホール）を開催し、宮地正人「平田国学から見た明治維新」、遠藤潤「復古神道と吉田家・白川家」、田崎哲郎「三河国の平田国学」、川名登「下総・上総の平田国学」の4報告を行った。

図録・目録や研究報告の刊行が利便性を与えたのみならず、マイクロフィルム撮影済のものを中心に、平田篤胤関係資料の多くが即日閲覧に供する資料とされたため、館外利用者が簡便な手続きで閲覧できるようになった。その結果、研究者の研究目的での利用や他の博物館の展示目的での借用などの需要が高まった。



フォーラムの風景

【展示】

🔗 「新収資料の公開」（2004年1月14日～2月15日）

1 展示の趣旨

前年度に収集した資料を速報的に紹介する企画であり、平田篤胤関係資料としては、整理・調査の中間報告として、ごく一部の資料を対象とした。展示した資料は、日記・書簡など19点と解説のための地図・グラフなどのパ

ネル。

2 展示の効果

同年秋に開催を予定していた特別企画の予告編としての意味を持たせることができた。

🔗 特別企画「明治維新と平田国学」（2004年10月13日～12月5日）（展示代表者 宮地正人）

1 展示の趣旨

本館で購入を進めていた平田篤胤関係資料のお披露目と共同研究「平田国学の再検討－篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究－」の成果発表を兼ね、展示を開催した。第1部「平田篤胤の生涯と学問」、第2部「全国4千の門人たち」、第3部「明治維新と平田国学」という構成に基づき資料を配列し、研究者はもとより一般観覧者にもわかりやすいように心がけた。中でも、篤胤没後の鏡胤・延胤と全国の門人との情報ネットワークや明治新政府内で果たした役割などに焦点を当て、幕末維新时期における平田派の諸活動について可視化するようにした。

2 展示の効果

文書資料が主要な展示品となったが、あえて史料の釈文は置かず、パネルを利用して文書の大意をつかめるようにした。また、本館で古文書の解読勉強会に参加している方々の協力を得て、「気吹舎」という相談コーナーを中央に設置し、観覧者への相談窓口を引き受けてもらった。このコーナーには史料の複写とその釈文を置き、展

示を補足する機能を持たせた。新出資料の陳列は専門家を満足させるものとなった一方、以上のような展示手法によって、一般の観覧者にも理解を促す効果を発揮することができた。刊行した図録『明治維新と平田国学』（2004年9月、80頁、うちカラー4頁）も好評だった。



特別企画のチラシ



特別企画「明治維新と平田国学」展示場のようす

🌀 れきはくプロムナード展示「平田国学と千葉県」(2005年7月1日～8月28日)

1 展示の趣旨

千葉県における平田門人6名(宮内嘉長・宮負定雄・大高善兵衛・弓削春彦・立野良道・高木英一郎)を取り上げ、その思想や業績について紹介した。

2 展示の効果

先に開催した特別企画「明治維新と平田国学」の会期中に寄せられた新たな情報をもとに、より地域に密着した視点から展示を作り上げることができた。

【新展開】

2009年3月にリニューアル・オープンした総合展示第3展示室「近世」の中に設けられた「村からみえる『近代』」コーナー内に、「国学の広がりー平田国学を中心にー」と題したスペースを設置した。ここでは、篤胤の対

露危機意識、上総・下総遊歴と交友関係、気吹舎の出版活動、門人集団の形成などについて解説をほどこし、文机、筆、硯、自画像、門人録など、平田篤胤関係資料の一部を常設展示することとなった。



第3展示室「国学の広がり」コーナー

中世東アジアプロジェクトー中世の生産と流通史研究ー

中世の日本は東アジア世界の大きなうねりの中に身を置いていた。中国をはじめとする海外の文物は間断なく流入し、日本の文物もまた世界に出ていき、相互に刺激し合った。この活発な動きはモノであり人であり、知識・技術のそれである。有形・無形の文物の交流を裏付けるのが、文献史料であり、考古遺物である。とくにその考古資料の圧倒的な蓄積は、中世史のイメージを塗り替えて久しい。

本館では基礎となる陶磁器資料の収集とともに、各地で出土する中世の生産関連遺物を複製品にすることで収集を可能にし、新しく出土した好資料を随時製作している。研究博物館という性格上、モノを通して議論できる最先端の研究レベルを保ちながら、共同研究の場を提供できるよう心がけている。

【資源】

1. 収集資料の概要・経緯

本館では、中世流通史の資料として、貿易陶磁器コレクションを収集している。貿易陶磁器は中国産の基準となる陶磁器を主体に、高麗、タイ産の資料に及ぶ。随時購入を続けており、現在90件を数える資料群となっている。これらとは別に浅川伯教収集朝鮮半島窯跡出土陶磁器コレクションがある。これは浅川伯教が戦前に朝鮮半島の窯跡を丹念に踏査し、採集した資料群で、すべてに採集地のラベルが付されており資料的価値は非常に高いものである。12世紀から18世紀の資料が含まれる。国内の数カ所で分蔵しており、本館では1987年に1000件余りを収蔵するにいたった。

また、生産関連遺物の複製品資料も随時製作している。博多・京都・堺・鎌倉出土の銭鑄型や、根城・浪岡城・勝山館といった北方の城館出土の工具や未成品資料など多岐にわたっており、2010年度は博多・豊後府内出土のキリシタン関連生産遺物の製作をおこなっている。

2. 収集資料の公開

「データベースれきはく」の「館蔵資料データベース」で情報を公開している。

また、総合展示第2展示室の「民衆の生活と文化」コーナーでは中世技術関連の資料を展示しており、生産関連遺物の複製資料は随時更新して公開している。



貿易陶磁器コレクション



浅川伯教コレクション・展示写真



生産関連遺物（銭鑄型）複製品・展示写真

【研究】

- ✎ 歴博個別共同研究；平成13～15年度「前近代の東アジアにおける人・モノ・技術の交流とシステム」（研究代表者：小野正敏）
- ✎ 科研（基盤（A）（2））；平成15～17年度「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」（研究代表者：小野正敏）
- ✎ 科研（基盤（A））；平成18～21年度「中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル・人・技術—」（研究代表者：小野正敏）
- ✎ 展示型共同研究；平成22～24年度「中世の技術と職人に関する総合的研究」（研究代表者：村木二郎）

1. 研究の目的

東アジアの中世は、海を共有する交易・交流世界に特徴づけられる。その求心力のひとつが、東アジアに共通して広く大量に流通した中国商品と、その裏付けとなった生産技術であった。広く普遍的に日常生活レベルで常に必要とされる品々が主体であることが特徴である。そのため、実物のモノの流通にとどまらず、生産技術が移植され、それを移転する人間集団が動いた。こうしたモノの受容や技術の移転は、社会の基盤から地域を大きく変化させる要因となった。その枠組みは、東アジア内各地域の相互関係であり、日本列島内では各地域間の関係としても検証される。そこで、モノがもつモデルとコピーの属性や生産技術の比較、技術の模倣と移植、受容など



対馬調査



資料調査

に焦点をあてて、一体性と地域個性を併せ持つ中世東アジアを、考古資料、文献史料、美術資料、民俗伝承、自然科学分析など、多様な資料と方法により、実証的に解明することを目的とする。

2. 研究の成果・成果の公表・社会への波及

- (1) フォーラム「アジアの海—沈没船が語る中世交流史—」（第37回歴博フォーラム、2002年）、「中世の湊町—行き交う人々と商品—」（第45回歴博フォーラム、2004年）：アジアの海を共有の地域世界として交流した、中世の人びとの活動を具体的に跡づける沈没船、港湾遺跡に焦点をあて、一般向けにフォーラムを開催した。
- (2) シンポジウム「高麗青磁の生産と流通」（日本貿易陶磁研究会25回研究集会、2004年）：近年の韓国窯跡採集資料の自然科学分析成果と、本館所蔵の浅川伯教収集朝鮮半島窯跡出土陶磁器コレクションの調査成果を合わせ、研究者向けにシンポジウムを開催した。韓国における中世陶磁器の基礎研究と評価されている。『貿易陶磁研究』No.25（日本貿易陶磁研究会、2005年）としてその成果は刊行された。
- (3) 国際シンポジウム「中世東シナ海と交易」（歴博国際シンポジウム、2005年）：第1部 東シナ海の島々、第2部 モノと流通、の2部立てで東シナ海全体を考古資料、文献史料など多視点から討論した。その成果は、科研成果報告書として刊行した『前近代の東アジアにおける人・モノ・技術の交流とシステム』（2006年）の一部をなしている。
- (4) 公開シンポジウム「中世都市と職人」（七尾市、2008年）、「中世における石材加工技術」（小田原市、2009年）：中世における生産と流通に関して、近年の発掘調査成果を基礎に、一般向け、研究者向けにそれぞれシンポジウムを開催した。成果は、科研成果報告書『中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル・人・技術—』（2010年）の一部として刊行している。



フォーラムレジュメ・科研報告書



小田原シンポ



国際シンポ

【展示】

◆ 企画展示「東アジア中世海道—海商・港・沈没船—」(2005年3月23日～5月22日) (展示代表者：小野正敏)

1. 展示の趣旨

世界の海は、それを共有する多くの国と地域を結び付け、人、モノ、文化、技術などの相互交流の場として、歴史の揺籃となり、原動力となってきた。東アジアでは、積極的な外交政策をとる宋が出現すると、新たな交流の

時代が到来し、海で結ばれた多くの地域や国々の激動を促した。そして、それは単に国家間の政治や経済の問題にとどまらず、一般の人々の日常生活にまで影響を及ぼすものであったことも前代とは異なる特徴である。またそこでは中華の建前のもとで国と国とが交流しただけで



展示ポスター



展示風景 2



展示風景 1



展示イベント・獅子舞

はなく、国境を意識しないで海を共通の世界として活躍した海民・海商たちのエネルギーあふれる姿があった。それは東アジアの大きな枠組みとして、16世紀のヨーロッパとの出会いにより地球規模の交易・交流へと変化するまで続いた。12世紀から16世紀の東アジアの海を舞台にして、中国、高麗・朝鮮、日本、琉球などの国や地域、人々が相互に影響を与えながら育んだ交流の歴史と文化の煌めきを、考古、文献、美術、民俗資料など、多様な展示品を通して描こうと企画した。

この展示は、館内外の研究者とともに実施した共同研究の成果公開として、研究計画策定の段階から位置付けてきた。特に、科研費補助金による研究成果を積極的に展示に反映する、本館特有の研究展開を一定の軌道に乗せたものでもある。

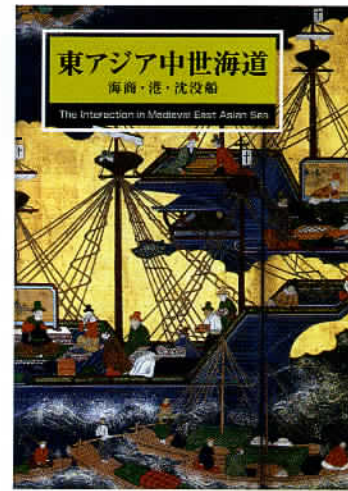
2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

この展示は、本館のほか、大阪歴史博物館、山口県立萩美術館・浦上記念館でも巡回展示をおこなった。

関連事業として、第256回歴史博講演会「東アジア中世海道―海を渡った人とモノ」（小野正敏）、大阪会場での講演会「中世東アジアの中の琉球」（池田榮史）、同「かけめぐる中国銭―中世日本の銭貨流通と東アジア」（嶋谷和彦）、萩会場での講演会「あこがれの舶来品『唐物』と沈没船」（小野正敏）を開催し、一般に研究内容を広めた。

また、考古学と中世史研究会との共催で、第3回考古学と中世史シンポジウム「中世の対外交流―場・人・技



展示図録

術」を会期中に本館で開催し、その成果は『考古学と中世史研究3 中世の対外交流―場・人・技術』（高志書院、2006年）として刊行した。

(2) 新たな研究課題の発見

この分野は、近年、研究が急速に進展しているが、その成果は論文や刊行物などにまとめられることが多く、総合的な展示として市民に公開されるのは初めての機会であった。同様の問題をもっているのが中世の技術史についてである。本展示でもその一端は取り上げたものの、踏み込んだ議論はできておらず、また総合的な視野からの研究はなされていないことがわかった。

【新展開】

1. 関連資料の収集（資源）

本館では総合展示第2展示室「民衆の生活と文化」コーナーで中世の技術史を扱っている。この展示コーナーに常に新しい研究成果を反映させるために、中世生産関連遺物の複製資料を製作しており、今後も継続事業として実施していく。

2. 今後の研究課題（研究）

東アジアの流通に力点をおいたこれまでの共同研究により、技術史を正面から捉え直す必要があることがわかった。これは、文献史料、絵画資料に加え、発掘調査により資料が増加している考古資料の比重が大きくなり、新

たな視点からの研究の見直しが迫られているからである。個別研究が徐々に蓄積されつつある現在、これを総合的に取り上げることで、次のステップに進むことが期待される。

3. 展示予定（展示）

前述の課題を踏まえ、2010年度より3年間、展示型共同研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」（研究代表者：村木二郎）を立ち上げることとなった。「東アジア中世海道」と同じく、共同研究をもとにした企画展示を2013年度に開催する予定である。

怪談・妖怪コレクションの調査研究と公開

想像力のあり方や精神世界への関心の高まりとともに、怪異や妖怪文化に関する調査・研究の重要性が増しつつある。2001年に開催した企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い」をきっかけにスタートした本コレクションは、資料の充実を図るとともに、館内外の研究者との共同研究を組織して多面的な視座からの研究を展開している。その成果の一端は、人間文化研究機構における連携展示やシンポジウムなどを通して発表してきたが、今後は第四室（民俗展示）の新構築においても積極的に活用し公開していく計画である。

【資源】

1、資料収集の概要および経緯

主に江戸時代から明治にかけて制作された怪談・妖怪・幽霊・死絵などに関する資料約900点を所蔵している。「百鬼夜行絵巻」「大江山酒呑童子」「兵六物語」などの妖怪絵巻、幽霊画、怪異を題材とする錦絵や摺物をはじめ、人気歌舞伎役者が死んだときに作られた死絵が中心である。本館が所蔵する資料を中心に2001年に開催した企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い」を機に「怪談・妖怪コレクション」を立ち上げ、関連資料の収集を進めている。



河童模型

2、収集資料の特色

怪談・妖怪に関する資料は多岐にわたるが、なかでも、真珠庵本系統の「百鬼夜行絵巻」をはじめ、登場する妖怪の種類や配列の異なる百鬼夜行絵巻を5巻所蔵している。江戸時代後期に数多く制作された「百鬼夜行絵巻」は絵師が不明の作品が多いが、狩野洞雲（1625-1694）が描いた「百鬼夜行図」は江戸時代前期の作品で、絵巻の成立を考えるうえでも重要な意義を有している。

死絵については、江戸時代後期から昭和初期までの歌舞伎役者だけでなく、それに関連する浮世絵師や義太夫



百鬼夜行図

の太夫なども所蔵している。さらに役者の死に際して発行された摺物なども関連資料として含んでいる。死絵は、緊急性による版木の流用など錦絵発行の状況を把握でき、また演劇史的にも役者に関する情報を保有しているものである。さらに民俗学的にも死の表象のあり方を通して、当時の宗教観を検討する上で重要な資料である。



本所七不思議（足洗郎）

3、資料調査の概要と意義

これまでに435点の死絵及び摺物について資料調査を行い、文字情報の翻刻だけでなく、改印や版元なども調べ、図柄のモチーフや見立てなどにも留意して解説を行った。死絵には死に関する植物や持ち物、衣装、他界の様子などが描かれており、そのモチーフを通して当時の死の観念を探求することが可能となる。また、戒名や死亡年月日、菩提寺などの文字情報から、役者の情報や死絵の発刊過程をも知ることができ、さらに当時の仏教認識なども探求できる資料である。そのため多様な研究に資するよう、資料集としての充実を図った。



資料図録

【研究】

共同研究「兆・応・禁・呪の民俗誌」(平成19～21年度) (研究代表者 常光徹)

1、研究の目的

日々の生活を営む人びとのあいだに培われてきた知と技のあり方を、主に予兆・占い・禁忌・呪い・妖怪・民間療法を対象として総合的に研究し、成果を民俗展示の新構築に活用する。



共同研究会

2、研究の成果と成果の公表

共同研究の成果については23年度に刊行予定だが、これまでにつぎのような研究活動と成果をまとめてきた。

(1) 歴博フォーラム「異界万華鏡を語る」(2001年7月20日)を開催した。異界をめぐる想像力についての研究発表のあと活発な議論が交わされた。異界の概念の検討とともに、異界がどのように描かれ語られてきたのか、具体的な事例に沿って討論した。

その成果は2002年に『異界談義』(角川書店)として出版した。

(2) 人間文化研究機構を構成する国際日本文化研究センター、国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館の3機関の連携でシンポジウム「百鬼夜行の世界」(2009年7月11日)を開催した。百鬼夜行絵巻の成立について、国文学、美術史、情報学などの立場から検討した。そ



シンポジウム風景

の成果は大学共同利用機関法人『人間文化』10号にまとめた。

(3) 俗信(妖怪・幽霊を含む)に関する調査報告や論文は着実に蓄積されているが、ただ基礎的な整理がなされていない。これまでの成果を確認し、新しい研究を展開していくうえで目録の作成が欠かせ

ないと考えて作業を進め、2010年に『俗信文献目録』(「兆・応・禁・呪の民俗誌」調査報告書)としてまとめた。



シンポジウムの記録

3、社会への波及・メディアの報道など

読売新聞 2009年7月25日 シンポジウム「百鬼夜行の世界」

趣味の水墨画10月号 シンポジウム「百鬼夜行の世界」

【展示】

✚ 企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」（2001年7月17日～9月2日）（展示代表者 常光徹）

✚ 人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」（2009年7月18日～8月30日）（展示代表者 小松和彦）

1、展示の趣旨

(1) 人びとは見えない世界をさまざまに想像することで、日々の不安を和らげ、生きていくための拠り所を得ようとしてきた。異界への想像力が生みだしてきた文化は、長い歴史のなかで豊かな広がり形成している。企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」は、「あの世とこの世」「妖怪変化の時空」「ウラを読む」「異界と遊ぶ」という4つのテーマを設けて、異界をめぐる想像力の世界を多面的に描くことを意図した。



企画展示図録

(2) 近年、想像力の文化や精神世界への関心の高まりとともに、その一環としての怪異や妖怪文化が注目を集め、学際的な研究が展開されている。人間文化研究機構を構成する国立歴史民俗博物館（歴博）・国際日本文化研究センター（日文研）・国文学研究資料館（国文研）の三機関が、これまで蓄積してきた研究成果や資料をリンクさせ、連携展示「百鬼夜行の世界」という形で広く公開するとともに、妖怪文化に関する新たな情報の発信をめざした。

に、百鬼夜行絵巻・兵六物語などの妖怪絵巻を、本館が開発した高精細デジタル画像表示システムをつかって見られるようにした。絵巻物は通常部分的にしか展示できないが、このシステムを利用することによって全体を自由に見ることが可能になり、好評であった。また、異界をめぐる遊びを対象とした体験型の展示は子どもたちに人気があった。

(2) 連携展示「百鬼夜行の世界」は、展示施設を備えた歴博と国文研の二会場で開催した。歴博では、大徳寺真珠庵蔵「百鬼夜行絵巻」（重要文化財）をはじめとして成立に深く関わると考えられている主要な絵巻を展示し、来館者からは見ごたえのある展示として評価をいただいた。国文研会場では、文芸作品を中心に百鬼夜行の系譜をたどるとともに江戸時代に花開く百鬼



連携展示チラシ

2、展示の効果

(1) 企画展示「異界万華鏡」では、異界に関する研究成果を四つの大きなテーマで構成し、来館者にわかりやすく興味をもってもらえるように工夫をした。とく



展示風景（異界万華鏡）



展示風景（百鬼夜行の世界）

に関する文化を紹介し、妖怪文化の多様な世界をわかりやすく展示して好評だった。

社会への波及・メディアの報道など（百鬼夜行の世界）

信濃毎日新聞 2009年7月23日

読売新聞 2009年7月25日

朝日新聞 2009年8月5日夕刊

産経新聞 2009年8月12日

毎日新聞 2009年8月13日夕刊

日本経済新聞 2009年8月14日

中外日報 2009年8月18日

千葉日報 2009年8月19日

NHK総合「日曜美術館 アートシーン」2009年7月26日

NHK国際放送「TOKYO EYE」2009年8月5日

【新展開】

今後もコレクションの充実を図り、歴史学、民俗学、文学、美術史など多面的な視座から怪異・妖怪研究を展開していく必要がある。百鬼夜行絵巻の成立と系譜関係の解明、近世に制作された絵画資料と民間伝承との関係、死絵の総合的研究など取り組むべき課題は多い。

展示については、2011年夏に特集展示「妖怪変化の時空」を予定している。また、現在すすめている総合展示

第四展示室（民俗展示）のリニューアルにおいて、これまで蓄積してきた研究と資料をもとに「妖怪の世界」をテーマとした展示を行う。

この他、広く資料を公開し活用するために、ホームページを利用してさらに高精細の画像を提供し、世界的な利用に供することで、日本の歴史と文化を理解する上での魅力的な資源としていくことを目指したい。



兵六物語



初代尾上松緑死絵



九代目市川團十郎死絵

神社資料の多面性に関する総合的研究

世界的視野からみても、古代以来、時代ごとの大きな変化を経ながら現代まで伝存継承されてきた日本の古い神社には、高い文化的・学術的価値があり、日本文化研究の上からも重要な位置を占めている。注目したいのは宗教としての神道ではなく、神社という文化的建造物の歴史と民俗である。神社は信仰の対象としてはもちろんであるが、建築史の上からも重要であるし、美術品や工芸品を伝世していることからみれば博物館的な機能ももっている。古文書や古典籍が所蔵されて図書館的な機能もある。また、儀礼や芸能の伝承の場としての機能もある。観光資源としての機能もある。植生景観などからみれば環境保全の機能もある。自然動物園や植物園の機能もある。つまり、神社は非常に多様で多面的な価値をもった文化的な建造物だという視点に立ち、日本文化の研究のうえで神社とは何かという問題を学際的に考察してみることにしたい。

【研究】

- 🔗 個別共同研究「神社の多面性に関する資料論的研究」（平成13～14年度）（研究代表者 新谷尚紀）
- 🔗 基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究」（平成16～18年度）（総括研究代表者 新谷尚紀）
 - A「神仏信仰に関する通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（研究代表者 三浦正幸）
 - B「生老死と儀礼に関する通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（研究代表者 新谷尚紀）
- 🔗 科学研究費による研究「神社資料の多面性に関する総合的研究—古社の伝存資料の分析を中心として—」（基盤B）（平成12～14年度）（研究代表者 新谷尚紀）
- 🔗 科学研究費による研究「神社資料の多面性に関する総合的研究—古社の伝存資料と神社機能の分析を中心として—」（基盤B）（平成15～17年度）（研究代表者 新谷尚紀）

1. 研究の目的

本研究は、神社を宗教的機能の面からとらえると同時に、その立地や環境から環境保存機能や公園的機能、自然動植物園的機能、また歴史資料館・図書館的機能、そして観光資源としての機能など、多面的な機能を有する有機的建造物とみることにより、神社という建造物が古代から現代までの長い歴史の展開の中で存続してきた意義とその存続を支えた神社機能の深層の意味を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の成果

主な研究成果としては以下の通りである。

まず、第一に共同研究員各位が分担しながら、研究の基礎的な作業として、古代、中世、近世、近現代を中心として神社研究の論文・文献目録の作成を行なった（『研究動向1・文献目録1』（平成18年4月）、『文献目録2（補遺）』（平成19年3月））。ここでは、論文・文献目録を編集し製本するだけでなく、論文の場合はすべてコピーをとって神社ごとにファイルを作成した。その後、それを活用しながら、研究動向の執筆を行ない、文献目録とあわせて掲載することを試みた。

第二に、これまで古代から近現代にいたる各時代、各分

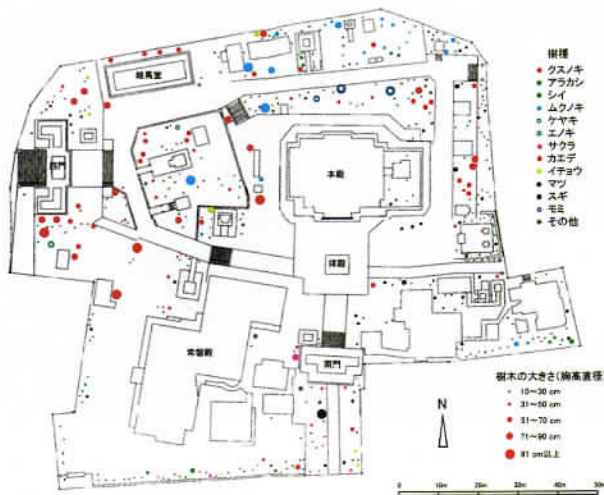
野において神社の研究は個別に行なわれてきたが、それらを統合した通史的、総合的な神社研究を推進するために、研究会では各分野の研究者による研究発表が重ねられた。その結果、従来、神社と神祇信仰の歴史の上で画期となる時期として、10世紀、14世紀、16世紀後半～17世紀、19世紀の4つの変革期が想定されてきたが、建築史学、中世史学、美術史学、有職故実研究の各分野の研究発表から、10世紀の変化が特に注目されるということが具体的に確認された。

第三に、個別の神社に関する研究成果である。



論文・文献目録（一部）

出雲大社、厳島神社、八坂神社に関連する論文・文献目録を作成した。



八坂神社の樹木分布 (2001年) (作図 小椋純一)

八坂神社境内には、胸高10cm以上の樹木が500本近くあるが、その中でクスノキが占める割合は大きい。特に境内西方には大きなクスノキが多くみられる。



明治初期の八坂神社西門付近 (八坂神社提供)

その一は、神社の森の植生の遷移についてである。神社の森、社叢は悠久の昔から変わらないというイメージがあったが、祇園八坂神社のご理解と協力を得て、また共同研究員の小椋純一氏(京都精華大学教授)の指導のもと、境内の、胸高直径10cm以上の立ち木総数470本の樹種の調査と直径の計測を行なった。その結果、江戸時代に祇園社といえば松林で知られていたのが、松は明治初期以降急速に枯れ、代わってクスノキやアラカシなどの常緑広葉樹が圧倒的ないきおいで繁茂してきていることが判明した。その理由については、明治以降、神社は国家神道の体制の中に入っていき、むやみに境内の樹木を伐採してはいけないという規制がなされ、境内の植生の手入れを行なわなくなり樹木を伐らなくなったため、落ち葉や下草がたまって土地が肥え、もともとやせた土地に適していた松は次第に枯れてしまったことなどが推定された。その一方、クスノキ



厳島神社社殿の復元模型 (本館蔵)

仁治2年(1241)に再建された社殿を古文書をもとに正確に復元した。平清盛が創建した社殿は、この仁治度のものに近かったと考えられる。



兵庫鎖太刀 重文(厳島神社蔵) 総長97.4cm

柄の部分に打ち付けてあるのは、執権北条氏の三鱗紋。仁治2年(1241)とは執権北条泰時が60歳で没する前年であった。一つの展示室に仁治2年の社殿復元模型とこの兵庫鎖太刀が存在したことがヒントを与えた。

などが神社にふさわしい樹種として植林されていったことの影響も大であった。

その二は、厳島神社の社殿の歴史についてである。一般に、厳島神社の社殿は、平清盛の創建になり、平安時代の京都の摂関貴族の寝殿造の建築様式を伝える貴重な文化遺産であると理解されているが、平清盛の建てた社殿は鎌倉時代の建永2年(1207)と貞応2年(1223)の二度にわたる火災によって消失し、現在に伝わる社殿は仁治2年(1241)に再建されたものであることが知られている。その再建時の社殿の復元が、共同研究員の三浦正幸氏(広島大学大学院教授)の指導によって、古文書の材木注文の解読などをもとになされた。それとともに、なぜ、仁治2年に再建がなされたのか、その理由についても議論が行なわれ、研究代表の新谷によってそれは執権北条泰時による政治的意味のある再建であろうという仮説が提出され、その歴史的検証が今後の課題の一つとなった。

3. 成果の公表・社会への情報発信

(1) 報告書の刊行 本基幹研究の成果報告書として、三浦正幸編『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集(特集号「神仏信仰の通史的研究」2008年 565頁)が刊行された。

(2) 企画展示「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(平成18年3月21日~5月7日開



『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集(2008年)

『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集 目次

三浦 正幸	共同研究の経過と概要
北條 勝貴	古代日本の神仏信仰
山口 えり	広瀬大忌祭と龍田風神祭の成立と目的について
有富 純也	神社本殿の成立と律令国家
藤森 馨	真名鶴神話と伊勢神宮の祭祀構造
三浦 正幸	神社本殿の分類と起源
山田 岳晴	神社玉殿の起源と特質
山口 佳巳	仁治度厳島神社廻廊の復元的研究
井上 寛司	中世諸国一宮制の歴史的構造と特質
永田 忠靖	中世後期における豊前一宮宇佐宮の動向
井原今朝男	神社史料の諸問題
井上 智勝	近世神社通史稿
橋本 政宣	吉田家の諸家官位執奏運動
幡鎌 一弘	十七世紀中葉における吉田家の活動
井上 智勝	近世の神職組織
小椋 純一	古写真と絵図類の考察からみた鎮守の社の歴史
関沢まゆみ	神社祭祀の伝承力
新谷 尚紀	伊勢神宮の創祀
ウルズラ・フラッヘ	ドイツ語圏の日本学における神社に関する研究
ウルズラ・フラッヘ	ドイツ語圏の日本研究から見た神仏分離
櫻井 治男	明治維新期における神仏分離と地域神社
五島 健児	史料紹介—近世祇園社年中行事関係史料
近藤 好和	神宝基礎史料集成（摂関期まで編年史料）
三橋 健	国史見在社について



第54回歴史博フォーラム「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」

催)において、研究成果の一部を公開した。展示図録「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(247頁)を編集、刊行した。

(3) 第54回歴史博フォーラム「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(平成18年4月8日)を開催した。

【資源】

1. 論文・文献目録の作成

共同研究の期間に、現在までの研究の到達点を確認するための基礎的作業として、出雲大社、厳島神社、祇園八坂神社の三社について書かれている研究論文および文献の目録の作成を行なった。

2. 資料調査の概要と意義

各神社の理解と協力をいただきながら、神社の植生、神社建築、神社祭祀等に関する調査を行ない、その資料情報の共有をはかりながらそれぞれ資料の作成を行なった。そのなかからいくつかの例を紹介する。

平成13年に八坂神社境内の樹木を中心とする植生調査を行ない、胸高直径(胸の高さでの直径)10cm以上の樹木(総数470本)の種類の確認(樹種は51種であった)と直径の計測を行ない、データ化した。これによって、明治初頭から現在までの約100年の間に、松からクスノキなどの常緑広葉樹(総樹木数の約6割をしめる)へと植生が変化したことが明らかになった。

仁治2年(1241)当時の厳島神社本殿を古文書によっ

て正確に再現した復元模型の製作を行なった(縦240×横180cm)。現在の厳島神社と比べると、本殿・拝殿・祓殿といった主要社殿は細部を除けば変わるところがないが、門客神社、楽房、平舞台などの付属社殿はかなり相異しており、反橋も現在より緩やかで長いこと、また明治維新の神仏分離で取り壊された本地堂も確認される、など、この再現によって明らかになった。

民俗研究映像「出雲の神々と祭り」(第一部美保神社、第二部佐太神社)(平成15年度)の作成。美保神社や佐太神社の古伝祭を維持継承していくために、明治以降、現在にいたるまでどのような工夫が重ねられてきているのか、その神社祭祀の伝承に注目して、撮影、編集を行なった。

3. 成果の公開

平成15年度企画展示『日本の神々と祭り—神社とは何か?—』において、それぞれの資料情報が公開されるとともに図録が刊行された。また『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集(2008年)において、これらの資料情報の学術的意義がそれぞれ述べられている。

【展示】

🔗 企画展示「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(平成18年3月21日～5月7日)(展示代表者 新谷尚紀)

1. 展示の趣旨

企画展示「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」で

は、前述のような神社の多面性に着目した研究成果の一部を、企画展示室第一室から第三室にそれぞれ次のよう



企画展示「日本の神々と祭り
—神社とは何か?—」ポスター



展示室風景
(第一室出雲大社—神祭りの源流と出雲大社—)



展示図録

な趣旨で展示を構想した。第一室では、神社の始原とその歴史について、国譲り神話など記紀の古代神話に登場して日本古代の代表的な神社と位置づけられている出雲大社を中心とした出雲世界とその歴史を紹介する。第二室では、神社の有する建築美術工芸品の保存伝承機能について、海上に浮かぶ華麗な寝殿造りの建築様式を今に伝える厳島神社とそこに奉納伝世されてきた美術工芸品の世界についてその意義を考えてみる。そして、御神宝とは何か。日本の神社の中心的位置にある伊勢神宮の20年ごとの遷宮とそれに際して奉獻され続けてきた御神宝の世界を紹介する。第三室では、古代都市の代表である平安京における疫病や怨霊を鎮める信仰を基盤として、貴族から庶民に至るまで幅広い神仏習合の信仰と華麗な都市祭礼の歴史を長く蓄積している祇園八坂神社と祇園祭の世界を紹介する。その中で神事と祭礼の関係について考えてみる。なお、いずれも研究者各位の学説にのっとり解説が示されているので、定説のない問題についてはいくつかの見解を併記することとした。

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会発信による効果

第一に、企画展示開催に合わせて第54回歴博フォーラム「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(平成18年4月8日)を開催し、約300名の参加がえられた。ここでは神社とは何か、という問題を、考古学の立場からは弥生・古墳時代の祭祀遺跡と神社の起源との関係について、建築史学の立場からは社殿建築の始原からその後の通史的展開について、植生史の立場からは神社を囲む樹林と植生の変遷の実証的・科学的追跡、また有職故実研究の立場からは神社にとって神宝とは何か、民俗学の立場からは神社にとっての伝統的な古伝祭の意味について、など、この研究成果のエッセンスを公開した。

第二に、総合研究大学院大学日本文学研究専攻特別講義(平成18年7月28日)で、新谷尚紀『「神社とは何か?」』の研究展示から見てきたもの—博物館と大学院の可能性:総合研究大学院大学文化科学研究科』が行なわれ、その内容は新谷著『伊勢神宮と出雲大社—「日本」と「天皇」の誕生—』(講談社 2009年)に補論として収録されている。

【新展開】

基層信仰は、歴博創設当初よりの基幹研究課題の一つである。これまで、設定された研究期間ごとの成果の小括が積み重ねられてきた。この研究は、神仏信仰と生死観念に関する基幹研究のなかの一つのブランチとして行なわれ、とくに神社の歴史を研究するということに焦点をしばつての研究であった。今後、共同研究のなかで、さまざまな専門分野と研究関心からさらに基層信仰の研究が学際的に継続されていくことが期待される。なお、

本研究課題のもう一つのブランチである「生老死と儀礼に関する通史的研究」については、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号 第141集(2008年 590頁)が刊行されており、さらに民俗学と歴史学と文学の研究者による学際協業によって研究が継続されて『人生儀礼事典』(仮題)の編集、刊行を通してその研究成果の社会発信が行なわれる予定となっている。

鉛同位体比法による青銅原料などの産地推定研究

	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	タイトル	代表者
共同研究		■	■	■												■	■	■	■		基盤研究「同位体を用いた産地決定法の研究」 国際共同研究「三国青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」 基盤研究「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」	齋藤 努 齋藤 努 藤尾慎一郎 齋藤 努
科学研究費				■	■	■			■			■	■						■		基盤(海外)「日中古代金属遺物の年代および産地に関する自然科学的比較研究」 基盤(A)「日中古代青銅器および土器の産地に関する自然科学的研究」 基盤(B)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」 基盤(B)「古代日韓における青銅器の製作および流通と原料産地の変遷に関する研究」	田口 勇 今村 峯雄 齋藤 努 齋藤 努
研究報告											■									■	「同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究」 「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」	
展示プロジェクト研究				■																	企画展示「お金の玉手箱」展示プロジェクト	西谷 大
展 示	■					■							■								企画展示「科学の目でみる文化財」(1992.3.20～5.17) 企画展示「お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—」(1997.3.18～5.18) 特別企画「歴史を探るサイエンス」(2003.10.21～11.30)	神庭 信幸 西谷 大 宇田川武久
展示図録						■															『お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—』	
フォーラム						■															「銭と日本人」(1997.4.20)	
フォーラム記録	■																				『科学の目でみる文化財』(アグネ技術センター) 『お金の不思議 貨幣の歴史学』(山川出版)	

*『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集(2010年)には、2009年2月19～21日に韓国国立中央博物館で行なわれた、国際共同研究「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」の研究成果報告会でのレジュメ資料が全文(日本語・韓国語)掲載されている。

【研究組織】

科研(基盤B)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」

平成15～17年度(研究代表者 齋藤 努)

- 今村 峯雄 本館研究部
- 亀田 修一 岡山理科大学総合情報学部
- ◎齋藤 努 本館研究部
- 高田 貫太 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 西谷 大 本館研究部
- 土生田純之 専修大学文学部
- 福尾 正彦 宮内庁書陵部
- 藤尾慎一郎 本館研究部

特別企画「歴史を探るサイエンス」平成15年10月21日～11月30日(展示代表者 宇田川 武久)

- 安達 文夫 本館研究部
- 今村 峯雄 本館研究部
- 岩淵 令治 本館研究部
- ◎宇田川武久 本館研究部
- 久留島 浩 本館研究部
- 齋藤 努 本館研究部
- 坂本 稔 本館研究部
- 鈴木 卓治 本館研究部
- 永嶋 正春 本館研究部
- 西本 豊弘 本館研究部
- 日高 薫 本館研究部
- 藤尾慎一郎 本館研究部

基盤研究(科研型)「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」平成20～22年度

(研究代表者 齋藤 努)

- 亀田 修一 岡山理科大学総合情報学部
- ◎齋藤 努 本館研究部
- 土生田純之 専修大学文学部
- 藤尾慎一郎 本館研究部
- 宋 義政 韓国国立中央博物館
- 金 炫希 韓国国立中央博物館
- 姜 炯台 韓国国立中央博物館
- 安 珠暎 韓国国立中央博物館
- 金 在弘 韓国国立中央博物館
- 李 昌熙 総合研究大学院大学大学院生
(本館リサーチアシスタント)

科研(基盤B)「古代日韓における青銅器の製作および流通と原料産地の変遷に関する研究」平成21～23年度

(研究代表者 齋藤 努)

- 亀田 修一 岡山理科大学総合情報学部
- ◎齋藤 努 本館研究部
- 土生田純之 専修大学文学部
- 藤尾慎一郎 本館研究部

古代の石碑の調査研究と公開

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	タイトル	代表者
共同研究																				基礎研究「古代における文字文化形成過程の基礎的研究」	平川 南
																				基礎研究「古代における文字文化の総合的研究」	小倉 慈司
																				国際共同研究「古代日本と古代朝鮮の文字文化に関する基礎的研究」	平川 南
科学研究費																				基礎(A)「古代における文字文化の総合的研究」	平川 南
展示プロジェクト研究																				企画展示「古代の碑一石に刻まれたメッセージ」 展示プロジェクト	阿部 義平
展示																				企画展示「古代の碑一石に刻まれたメッセージ」 (1997.9.30～11.24)	阿部 義平
展示図録																				『古代の碑』	

*今、私たちが毎日読んだり書いたりしている日本語であるが、古代、文字をもたなかった日本(倭)はどのようにして中国、古代朝鮮の文字文化を受け入れてきたのか?その文字の歴史の解明にむけての研究である。本館創設以来取り組んできている正倉院文書の複製プロジェクトのほか、木簡、漆紙文書、墨書土器の研究などの蓄積のうえに展開されている(創設20周年記念企画展示「古代日本 文字のある風景」(2002.3.19～6.9)、歴博フォーラム記録『古代日本 文字の来た道』大修館書店(2005年)ほか)。

【研究組織】

企画展示「古代の碑一石に刻まれたメッセージ」平成9年9月30日～11月24日(展示代表者 阿部 義平)

板橋 和子	九州女学院高等学校
倉住 靖彦	九州歴史資料館
小池 浩平	群馬県立歴史博物館
田熊 信之	昭和女子大学文学部
東野 治之	大阪大学文学部
前川 清一	熊本県教育委員会
山本 信夫	太宰府市教育委員会
◎阿部 義平	本館研究部
高橋 照彦	本館研究部
仁藤 敦史	本館研究部
平川 南	本館研究部

基礎研究「古代における文字文化の総合的研究」平成22～24年度(研究代表者 小倉 慈司)

李 成市	早稲田大学文学学術院
犬飼 隆	愛知県立大学日本文化学部
吉岡 真之	東京大学史料編纂所
関尾 史郎	新潟大学人文社会教育科学系
神野志隆光	明治大学大学院
新川登喜男	早稲田大学文学学術院
山口 英男	東京大学史料編纂所
三上 喜孝	山形大学人文学部
市 大樹	大阪大学大学院文学研究科
安部聡一郎	金沢大学人文学類
田中 史生	関東学院大学経済学部
森下 章司	大手前大学人文科学部
中林 隆之	新潟大学人文社会教育科学系
関 和彦	共立女子第二中学高等学校
寺崎 保広	奈良大学文学部
平川 南	本館館長
高橋 一樹	本館研究部
小池 淳一	本館研究部
永嶋 正春	本館研究部
○仁藤 敦史	本館研究部
◎小倉 慈司	本館研究部
高田 貫太	本館研究部

科研(基礎A)「古代における文字文化形成過程の総合的研究」平成22～26年度(研究代表者 平川 南)

<研究代表者>

◎平川 南 本館館長

<研究分担者>

李 成市	早稲田大学文学学術院
犬飼 隆	愛知県立大学日本文化学部
仁藤 敦史	本館研究部
小倉 慈司	本館研究部

<連携研究者>

高橋 一樹	本館研究部
小池 淳一	本館研究部
永嶋 正春	本館研究部
高田 貫太	本館研究部
関尾 史郎	新潟大学人文社会教育科学系
安部聡一郎	金沢大学人文学類
神野志隆光	明治大学大学院
吉岡 真之	東京大学資料編纂所
市 大樹	大阪大学大学院文学研究科
三上 喜孝	山形大学人文学部
新川登喜男	早稲田大学文学学術院
山口 英男	東京大学資料編纂所
田中 史生	関東学院大学経済学部
森下 章司	大手前大学人文科学部
中林 隆之	新潟大学人文社会教育科学系
寺崎 保広	奈良大学文学部

<研究協力者>

関 和彦	共立女子第二中学高等学校
橋本 繁	日本学術振興会特別研究員
武井 紀子	日本学術振興会特別研究員
畑中 彩子	学習院大学東洋文化研究所客員研究員
高木 理	早稲田大学大学院博士課程
大高 広和	東京大学大学院博士課程

国際共同研究「古代日本と古代朝鮮の文字文化に関する基礎的研究」平成21～24年度(研究代表者 平川 南)

李 成市	早稲田大学
三上 喜孝	山形大学文学部
高橋 一樹	本館研究部
村木 二郎	本館研究部
○仁藤 敦史	本館研究部
◎平川 南	本館館長
崔 光植	韓国国立中央博物館・館長
具 一会	韓国国立中央博物館・歴史部長
徐 命希	韓国国立中央博物館・歴史部学芸研究士
○李 鎔賢	韓国国立中央博物館・歴史部学芸研究士
◎朴 仲煥	韓国国立中央博物館・歴史部学芸研究官

平田篤胤関係資料の調査研究と公開

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	タイトル	代表者
共同研究										基盤研究「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」	宮地 正人
科学研究費										基盤 (B) 「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」	宮地 正人 2003～2005 樋口 雄彦 2005～2006
研究報告				12月		10月		10月	10月	『平田国学の再検討 (一)』 『平田国学の再検討 (二)』 『平田国学の再検討 (三)』 『平田国学の再検討 (四)』	
資料調査プロジェクト										「平田篤胤関係資料の調査」	宮地 正人
資料目録										『平田篤胤関係資料目録』	
フォーラム										「明治維新と平田国学」(2004.9.25)	
展示プロジェクト研究										特別企画「明治維新と平田国学」	宮地 正人
展示										新収資料の公開 (2004.1.14～2.15) 特別企画「明治維新と平田国学」(2004.10.13～12.5) れきはくブロード展示「平田国学と千葉県」(2005.7.1～8.28) 第3展示室「国学の広がり―平田国学を中心に―」(2009.3.18～)	宮地 正人
展示図録										『明治維新と平田国学』	
報告書										『平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―』2分冊(科研報告書)	

【研究組織】

基盤研究「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」平成15～17年度

(研究代表者 宮地 正人)

- 遠藤 潤 國學院大學日本文化研究所
- 熊澤恵里子 東京農業大学教職学術情報課程
- ◎宮地 正人 本館館長
- 樋口 雄彦 本館研究部

特別企画「明治維新と平田国学」展示プロジェクト 平成15～16年度 (展示代表者 宮地 正人)

- 遠藤 潤 國學院大學日本文化研究所
- 川名 登 千葉経済大学
- 熊澤恵里子 東京農業大学教職学術情報課程
- 田崎 哲郎 愛知大学名誉教授
- ◎宮地 正人 本館館長
- 樋口 雄彦 本館研究部
- 新谷 尚紀 本館研究部

中世東アジアプロジェクト—中世の生産と流通史研究—

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	タイトル	代表者
共同研究						■	■	■										個別共同研究「前近代の東アジアにおける人・モノ・技術の交流とシステム」	小野 正敏
																		展示型共同研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」	村木 二郎
科学研究費							■	■	■									基盤 (A)「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」	小野 正敏
											■	■						基盤 (A)「中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル・人・技術—」	小野 正敏
展示プロジェクト研究							■	■	■									企画展示「東アジア中世海道—海商・港・沈没船—」展示プロジェクト	小野 正敏
展示									■									企画展示「東アジア中世海道—海商・港・沈没船—」(2005.3.23~5.22)	小野 正敏
展示図録									■									『東アジア中世海道—海商・港・沈没船—』	
フォーラム						■			■									「アジアの海—沈没船が語る中世交流史—」(2002.2.16) 「中世の湊町—行き交う人々と商品—」(2004.2.7)	
シンポジウム										■				■				国際シンポジウム「中世東シナ海と交易」(2005.12.24~25) 公開シンポジウム「中世都市と職人」七尾市(2008.10.12) 公開シンポジウム「中世における石材加工技術」小田原市(2009.8.22~23)	
報告書											■							『前近代の東アジアにおける人・モノ・技術の交流とシステム』(科研報告書) 『中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル・人・技術—』(科研報告書)	

【研究組織】

共同研究「前近代の東アジアにおける人・モノ・技術の交流とシステム」平成13~15年度(研究代表者 小野 正敏)

池田 榮史 琉球大学法文学部
大庭 康時 福岡市教育委員会
金沢 陽 出光美術館
菊池 誠一 昭和女子大学文学部
佐伯 弘次 九州大学大学院人文科学研究院
嶋谷 和彦 堺市教育委員会
関 周一 つくば国際大学産業社会学部
中島 圭一 慶應義塾大学文学部
新田 栄治 鹿児島大学法文学部
福島 金治 愛知学院大学文学部
齋藤 努 本館研究部
阿部 義平 本館研究部
上野 祥史 本館研究部
◎小野 正敏 本館研究部
西谷 大 本館研究部
藤尾慎一郎 本館研究部
村木 二郎 本館研究部
篠原 徹 本館研究部

福島 金治 愛知学院大学文学部
福原 敏男 日本女子大学人間社会学部
◎小野 正敏 本館研究部
阿部 義平 本館研究部
平川 南 本館研究部
青山 宏夫 本館研究部
齋藤 努 本館研究部
仁藤 敦史 本館研究部
西谷 大 本館研究部
○村木 二郎 本館研究部
小瀬戸恵美 本館研究部
高橋 一樹 本館研究部
上野 祥史 本館研究部
藤尾慎一郎 本館研究部
篠原 徹 本館研究部

基盤研究(展示型)「中世の技術と職人に関する総合的研究」平成22~24年度(研究代表者 村木 二郎)

大澤 研一 大阪歴史博物館
小野 正敏 人間文化研究機構本部
川口 洋平 長崎県世界遺産推進室
栗木 崇 熱海市教育委員会
佐伯 弘次 九州大学大学院人文科学研究院
佐々木健策 小田原市教育委員会
鈴木 康之 広島県立歴史博物館
関 周一 つくば国際大学産業社会学部
坪根 伸也 大分市教育委員会
中島 圭一 慶應義塾大学文学部
福島 金治 愛知学院大学文学部
四柳 嘉章 石川県輪島漆芸美術館
齋藤 努 本館研究部
高橋 一樹 本館研究部
仁藤 敦史 本館研究部
日高 薫 本館研究部
○松田 睦彦 本館研究部
◎村木 二郎 本館研究部

企画展示「東アジア中世海道—海商・港・沈没船—」平成17年3月23日~5月22日(展示代表者 小野 正敏)

池田 榮史 琉球大学法文学部
上田 秀夫 山口県立萩美術館・浦上記念館
右代 啓視 北海道開拓記念館
大澤 研一 大阪歴史博物館
大庭 康時 福岡市教育委員会
金沢 陽 出光美術館
菊池 誠一 昭和女子大学文学部
佐伯 弘次 九州大学大学院人文科学研究院
嶋谷 和彦 堺市教育委員会
関 周一 つくば国際大学産業社会学部
中島 圭一 慶應義塾大学文学部
新田 栄治 鹿児島大学法文学部

怪談・妖怪コレクションの調査研究と公開

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	タイトル	代表者
共同研究								■	■				基幹研究「列島の生活民俗誌」 A「兆・応・禁・呪の民俗誌」	常光 徹 常光 徹
展示プロジェクト研究	■									■			企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」展示プロジェクト 連携展示「百鬼夜行の世界」展示プロジェクト	常光 徹 小松 和彦
展示		■										■	企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」(2001.7.17~9.2) 人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」(2009.7.18~8.30) ■ ミニ企画「妖怪変化の時空」(2011.8.2~9.4) (予定)	常光 徹 小松 和彦 常光 徹
展示図録		■										■	『異界万華鏡』 『百鬼夜行の世界』	
フォーラム		■										■	『異界万華鏡を語る』(2001.7.20) 日文研・国文研・歴博連携シンポジウム「百鬼夜行の世界」(2009.7.11)	
フォーラム記録			■										『異界談義』(角川書店)	
資料調査プロジェクト							■	■					館蔵死絵資料調査プロジェクト	山田 慎也
資料図録												■	『死絵』	
報告書												■	『俗信文献目録』(基幹研究「兆・応・禁・呪の民俗誌」報告書)	

【研究組織】

企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」展示プロジェクト 平成12~13年度 (展示代表者 常光 徹)

網野 房子 専修大学法学部
池上 良正 駒澤大学文学部
香川 雅信 兵庫県立歴史博物館
神居 文彰 学識経験者
神野 善治 武蔵野美術大学造形学部
鈴木 一馨 財団法人東方研究会
高原 豊明 学識経験者
鳥越けい子 聖心女子大学文学部
長谷部八朗 駒澤大学仏教学部
福原 敏男 日本女子大学人間社会学部
丸山 伸彦 金沢美術工芸大学
宮田 登 神奈川大学経済学部
村上 興匡 東京大学大学院人文社会系研究科
横山 泰子 法政大学工学部
安達 文夫 本館研究部
大久保純一 本館研究部
小瀬戸恵美 本館研究部
久留島 浩 本館研究部
設楽 博己 本館研究部
内田 順子 本館研究部
篠原 徹 本館研究部
島村 恭則 本館研究部
◎常光 徹 本館研究部
○山田 慎也 本館研究部

基幹研究「列島における生活誌の総合的研究」平成19~21年度 (総括研究代表者 常光 徹)

A「兆・応・禁・呪の民俗誌」平成19~21年度 (研究代表者 常光 徹)

梅野 光興 高知県立歴史民俗資料館
梅屋 潔 東北学院大学教養学部
勝田 至 芦屋大学
川島 秀一 気仙沼リアス・アーク美術館
川田 牧人 中京大学現代社会学部
川野 和昭 鹿児島県歴史資料センター黎明館
小島 博巳 ノートルダム清心女子大学人間生活学部
斉藤 研一 武蔵大学
鈴木 正崇 慶應義塾大学文学部
花部 英雄 國學院大学文学部
横山 泰子 法政大学工学部
鯨井千佐登 宮城工業高等専門学校 (本館客員教授)
大久保純一 本館研究部
村木 二郎 本館研究部
小池 淳一 本館研究部
◎常光 徹 本館研究部
○松尾 恒一 本館研究部
安室 知 神奈川大学経済学部
山田 慎也 本館研究部
篠原 徹 人間文化研究機構本部理事
崔 錫栄 韓国中央大学校講師
村山 絵美 総合研究大学院大学
(本館リサーチアシスタント)

神社資料の多面性に関する総合的研究

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	タイトル	代表者
共同研究										個別共同研究「神社の多面性に関する資料論的研究」 基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究」 A「神仏信仰に関する通史的研究Ⅰ」	新谷 尚紀 新谷 尚紀 三浦 正幸
科学研究費										基盤 (B)「神社資料の多面性に関する総合的研究—古社の伝存資料の分析を中心として—」 基盤 (B)「神社資料の多面性に関する総合的研究—古社の伝存資料と神社機能の分析を中心として—」	新谷 尚紀 新谷 尚紀
研究報告										■「神仏信仰に関する通史的研究」	
資料調査プロジェクト										民俗研究映像「出雲の神々と祭り」(1美保神社 2佐太神社)	
展示プロジェクト研究										企画展示「日本の神々と祭り」展示プロジェクト	
展示										企画展示「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(2006.3.21~5.7)	新谷 尚紀
展示図録										『日本の神々と祭り—神社とは何か?—』	
フォーラム										「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」(2006.4.8)	
報告書										『研究動向・文献目録1』(古代史、中世史、近世史、神宝、神社建築、民俗学他の分野別の神社関係雑誌掲載論文目録) 『文献目録2 (補遺)』 『報告・討論要旨集』(〈神社〉の成立、中世諸国—宮制の理解、明治維新时期における神仏分離と地域社会ほかのテーマで行なわれた共同研究のワークショップ記録) ■「神社資料の多面性に関する総合的研究」(科研報告書)	

【研究組織】

基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究」(総括研究代表者 新谷 尚紀)

A「神仏信仰に関する通史的研究Ⅰ」平成16~18年度
(研究代表者 三浦 正幸)

井上 寛司 大阪工業大学情報科学部
井上 智勝 大阪歴史博物館学芸員
ウルズラ・フラッヘ
ドイツ・日本研究所
遠藤 潤 國學院大學日本文化研究所
小椋 純一 京都精華大学人文学部
五島 健児 八坂神社文教部
櫻井 治男 皇學館大學社会福祉学部
園田 稔 皇學館大學大学院文学研究科
橋本 政宣 東京大学名誉教授
東四柳史明 金沢学院大学美術文化学部
藤森 馨 国士館大學文学部
北條 勝貴 埼玉学園大学大学院
三橋 健 國學院大學神道文化学部
牟禮 仁 皇學館大學神道研究所
近藤 好和 神奈川大学 (本館客員教員)
◎三浦 正幸 広島大学大学院文学研究科
(本館客員教員)
井原今朝男 本館研究部
吉岡 眞之 本館研究部
○新谷 尚紀 本館研究部
関沢まゆみ 本館研究部
松尾 恒一 本館研究部
山田 岳晴 本館研究機関研究員
山口 えり 早稲田大学大学院
(本館リサーチアシスタント)

企画展示「日本の神々と祭り—神社とは何か?—」展示プロジェクト 平成16~17年度 (展示代表者 新谷 尚紀)

有富由紀子 東京女子大学
飯田 楯明 巖島神社
大島 暁雄 元文化庁文化財部
小椋 純一 京都精華大学人文学部
五島 健児 八坂神社
齋藤ミチ子 元國學院大學日本文化研究所
島谷 弘幸 東京国立博物館
関 和彦 共立女子第二高等学校
千家和比古 出雲大社
土手内賢一 NHK 番組制作局
濱島 正士 別府大学文学部
藤井 昭 元広島女学院大学
松本 岩雄 島根県古代文化センター
三橋 健 國學院大學神道文化学部
村上 忠喜 京都市文化市民局文化部文化財保護課
山路 興造 京都嵯峨芸術大学
和田 萃 京都教育大学教育学部
近藤 好和 神奈川大学 (本館客員教員)
三浦 正幸 広島大学大学院文学研究科
(本館客員教員)
安達 文夫 本館研究部
宇田川武久 本館研究部
大久保純一 本館研究部
日高 薫 本館研究部
井原今朝男 本館研究部
小島 道裕 本館研究部
吉岡 眞之 本館研究部
春成 秀爾 本館研究部
村木 二郎 本館研究部
◎新谷 尚紀 本館研究部
○関沢まゆみ 本館研究部
松尾 恒一 本館研究部

※研究組織の◎は代表者、○は副代表者、所属等は在任時のものである。



歴博のめざすもの 事例集 1
博物館型研究統合の実践 (2010年3月)

目次

- 紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究と公開
- 「高松宮家伝来禁裏本」の調査研究と公開
- 洛中洛外図屏風の調査研究と公開
- 総合展示第3展示室「近世」の再構築をめぐる研究
- 年代歴史学研究
- 映像制作による民俗研究と映像資料の保存・公開

案内図



●交通案内

京成電鉄利用の場合

京成上野駅から京成佐倉駅(京成本線經由特急利用の場合約55分)下車、バス約5分または徒歩15分
※一部直通バスあり

JR東日本利用の場合

東京駅から総武本線佐倉駅(快速利用の場合約60分)下車、バス約15分 ※一部直通バスあり

自動車利用の場合

東関東自動車道「四街道IC」または「佐倉IC」から約20分
※無料大駐車場完備

歴博のめざすもの 事例集 2
博物館型研究統合の実践

2011年3月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-0123 (代) <http://www.rekihaku.ac.jp>



表紙：百鬼夜行図
裏表紙：貿易陶磁器コレクション
※ともに国立歴史民俗博物館蔵